

## 二条東院構想試論（下）

平 沢 竜 介

### 四

ところで、二条院の東に二条東院を造営し、二条院の西の対に紫の上、二条東院の東の対に明石の君、西の対に花散里、北の対に末摘花を配して、四方四季の邸を造営するとともに、二条院に明石の姫君、秋好中宮、二条東院に玉鬘等の人物を入居させるといふ二条東院構想は、物語執筆のどのような時点で物語作者によって構想されたのであろうか。それにはまず、二条院・二条東院空間に住まう四人の女性それぞれに春、夏、秋、冬の四つの季節のいづれかと、東、西、南、北の四つの方位のいづれかを賦与し、二条院の西の対に紫の上、二条東院の東の対に明石の君、西の対に花散里、北の対に末摘花を住まわせる二条東院構想の根幹とも言うべき構想の成立について考えることが必要とならう。

紫の上は若紫巻で登場して以降、常に東・春という属性を与えられている。明石の君は若紫巻で都の西、明石の浦に住むと紹介され、以後この地名で呼ばれることが多いことから西という方位を賦与されていると考えられる。五行思想で西は秋に相当すること、明石の君が初めて源氏

と逢う季節や明石から大堰に移住する季節が秋であることなどから秋という属性が与えられていると考えられる。末摘花は、常陸の宮の娘であることから東という属性を与えられるが、末摘花巻以降の記述においては冬という属性が賦与されている。五行思想では冬は北に相当するから、末摘花は東・北・冬という属性を有していると想定される。紫の上、明石の君は若紫巻、末摘花は末摘花巻に登場しており、登場した巻で彼女たちが表象する方位と季節は示されている。

河添房江は、若紫巻の北山山頂の場面における源氏の供人たちの噂話から、「東と西の水平軸、そして山と海の垂直軸の二元」に源氏の「王権の支配のコスモロジーが集約的に立ち顕れている」と指摘し、「東と西の水平軸」による支配の根拠を大嘗祭に求めた<sup>1)</sup>。それを承けて私は「山と海の垂直軸」による支配の根拠を『古事記』の日向神話に求め、若紫巻で登場する紫の上をコノハナサクヤビメ、末摘花巻に登場する末摘花をイワナガヒメに比定した<sup>2)</sup>。もし、この想定が正しいとするとコノハナサクヤビメとイワナガヒメは物語に同時に登場しなければならぬ。ということは、若紫巻と末摘花巻は、ともに源氏十八歳の年の出来事を記した巻であるが、紫の上がコノハナサクヤビメ、末摘花がイワナガ

ヒメに比定されるとすると、紫の上が物語に初めて登場する若紫巻と末摘花が初めて物語に登場する末摘花巻は、連続して書かれたものでなければならぬということになる。先に若紫巻で紫の上が東・春、明石の君が西、秋を表象し、末摘花巻で末摘花が東・北・冬を表象するとしたが、だとすると若紫巻、末摘花巻という連続した巻に、紫の上、明石の君、末摘花という三人の重要な人物が初めて物語に登場し、それぞれの方位と季節を規定されているということになる。

ただし、南・夏の属性を賦与される花散里の登場は、若紫巻、末摘花巻よりかなり後の花散里巻である。花散里巻は、須磨巻の直前に位置する巻であるが、花散里はその巻頭部分に

麗景殿と聞こえしは、宮たちもおはせず、院崩れさせたまひて後、いよいよあはれなる御ありさまを、ただこの大將殿の御心にもて隠されて過ぐしたまふなるべし。御妹の三の君、内裏わたりにてはかなうほのめきたまひしなごりの、例の御心なれば、さすがに忘れもはてたまはず、わざとももてなしたまはぬに、人の御心をのみ尽くしはてたまふべかめるをも、このごろ残ることなく思し乱るる世のあはれのくさはひには思ひ出でたまふには、忍びがたくて、五月雨の空めづらしく晴れたる雲間に渡りたまふ。

(花散里の二五三―二五四)

と登場する。花散里巻はこの冒頭部分に示された「五月雨の空めづらしく晴れたる雲間」という夏のある日の出来事が記されている極めて短い巻であるが、そこには郭公、橘の花といった夏の景物がふんだんに取り入れられ、花散里という呼称も橘の花に由来するというように、花散里には夏という属性を強く賦与されており、そこから彼女に南という属性も賦与される。

花散里巻の叙述によれば、花散里は桐壺帝在位中に姉の麗景殿女御とともに内裏で暮らしていた頃、源氏とかりそめの関係を持ったようである。桐壺院崩御後、花散里は姉の女御と同じ邸に暮らしていたが、経済的に恵まれていなかったことから、姉妹は源氏の経済的な庇護のもとで細々と暮らしている。源氏は花散里に格別深い恋愛感情を持っているわけではないが、花散里は麗景殿女御とともに、桐壺帝在位中の懐かしい時代を共有し、心置きなく語り合えるかけがいのない女性として、源氏にとって特別の存在として描かれている。

源氏と花散里の関係は、桐壺帝在位中のこととされるから、源氏と花散里の関係はかなり以前からのもの、少なくとも桐壺帝が讓位する以前、つまり花宴巻以前と推測されるが、その花散里が花散里巻になって突如登場するということは、物語作者がここに至って花散里を急遽物語に登場させる必要に迫られたことを意味しよう。

先にも引用した松風巻冒頭部分に

東の院造りたてて、花散里と聞こえし、移ろはしたまふ。西の対、渡殿などかけて、政所、家司など、あるべきさまにしおかせたまふ。東の対は、明石の御方と思しおきてたり。北の対はことに広く造らせたまひて、かりにてもあはれと思して、行く末かけて契り頼めたまひし人々集ひ住むべきさまに、隔て隔てしつらはせたまへるしも、なつかしう見どころありてこまかなり。寝殿は塞げたまはず、時々渡りたまふ御住み所にして、さる方なる御しつらいどもしおかせたまへり。

(松風(2) 三九七)

とあるように、源氏が須磨、明石での流離を経験し都に戻った時、源氏の失脚、都からの退避という辛い状況の中でも源氏を見捨てず、彼のことを思い続けていた女性たちを源氏の近くに住ませようとして造営を

思い立ったのが二条東院であった。とすると、二条東院に入る女性は、源氏が須磨に退去する以前に、源氏と関係を持っていなければならぬ。しかも、二条院・二条東院空間は、四方四季の邸となることが予定されているにも関わらず、源氏が須磨に退去する直前まで、物語には南・夏を表象する女性が登場していない。とすれば、須磨巻以前に、どうしても南・夏を表象し、かつ須磨退去の直前に源氏と関係を持ったとするよりも、それ以前、源氏が栄華を謳歌していた桐壺帝在位中から関係を持ち、源氏が不遇な時期を迎えても源氏への思いを抱き続けた女性の登場が要請されよう。若紫巻、末摘花巻の記述から、花散里はそうした要件を十全に満たした女性ということができよう。

見てきたように、南・夏を表象する花散里の登場は、若紫巻、末摘花巻から七年後の花散里巻を俟たなければならなかったのであるが、末摘花巻を丁寧に読むと、物語作者が末摘花巻執筆時点で、将来南・夏を表象する女性を物語に登場させることを意図していたことを窺わせる記述が見出される。源氏が末摘花の容貌を初めて確認した朝、末摘花の邸を後にする場面は次のように描かれる。

御車寄せたる中門の、いといたうゆがみよるばいて、夜目にこそ、しるきながらもよろづ隠ろへたること多かりけれ、いとあはれにさびしく荒れまどへるに、松の雪のみあたたかげに降りつめる、山里の心地してもあはれなるを、かの人々の言ひし律の門は、かうやうなる所なりけむかし、げに心苦しくらうたげならん人をここにすゑて、うしろめたう恋しと思はばや、あるまじきもの思ひは、それに紛れなむかしと、思ふやうなる住み処にあはぬ御ありさまはとるべき方なしと思ひながら、我ならぬ人はまして見忍びてむや、わがかうて見馴れけるは、故親王のうしろめたしとたくへおきたまひけ

む魂のしるべなめり、とぞ思さるる。

橘の木の埋もれたる、御隨身召して払はせたまふ。うらやみ顔に、松の木のおのれ起きかへりてさとこぼるる雪も、名にたつ末のと見ゆるなどを、いと深からずとも、なだらかなるほどにあひしらはむ人もがなと見たまふ。（中略）世の常なるほどの、ことなることなかならば、思ひ棄ててもやみぬべきを、さだかに見たまひて後はなかなかあはれにのみじくて、まめやかなるさまに常におとづれたまふ。黒貂の皮ならぬ絹、綾、綿など、老人どもの着るべき物のたぐひ、かの翁のためまで上下思しやりて奉りたまふ。かやうのまめやか事も恥づかしげならぬを、心やすく、さる方の後見にてはぐくまむと思はしとりて、さまことにさならぬうちとけわざもしたまひけり。

（末摘花(1)二九五—二九六）

源氏は荒れ果てた末摘花の邸を見るにつけ、雨夜の品定めで左馬頭の言った律の門に住む「思ひの外にらうたげならむ人」のことを思い出すのであるが、実際には律の門に住む女は、そのような女とは全く正反對の不器量でまともな会話もできない女であったことに落胆する。しかし自分以外の男でこの女を世話する者もないであろう、末摘花の父である亡き常陸宮の魂がここに導いたのであるろうと思ひ、源氏は末摘花への経済面での援助を決意する。

ところで、この場面で注目されるのは、引用した文章の中間部分、「橘の木の埋もれたる、御隨身召して払はせたまふ。うらやみ顔に、松の木のおのれ起きかへりてさとこぼるる雪も、名にたつ末のと見ゆるなどを、いと深からずとも、なだらかなるほどにあひしらはむ人もがなと見たまふ」という部分である。この文章は、源氏が末摘花の容姿や態度に落胆しながらも、末摘花と巡り会ったのも、末摘花の父、故常陸宮の

魂の導きだったのであるうと思いを巡らす文章のすぐ後に続く文章であるが、「名にたつ末の」という表現は、「わが袖は名に立つ末の松山か空より波の越えぬ日はなし」(後撰集・恋二・土佐)という歌を引き歌とし、雪を波に見立てて、男の心変わりを嘆いている女性の心情を表しているとの解釈できよう。末摘花の邸を出る際に、源氏が隨身に、雪に埋もれている橘の木を払わせると、それを恨んで松の木がひとりでに起き反り、枝に積もった雪がこぼれ落ちる様を、まるで松の木が橘の木に嫉妬しているようだと思つて、源氏はたいそう深い関係ではないにしても、穏やかに受け答えしてくれる人がいたらいのにと思う。引用した箇所をそのまま解釈すれば右のような理解となるが、「うらやみ顔に、松の木のおのれ起きかへりて」と松が擬人化され、源氏が橘の木に目を掛けるのを嫉妬するという描写は、松が末摘花を象徴すると考えられることからすると、橘もある女性を象徴すると捉えることができよう。とすると、源氏が橘に目を掛けたことで「松がうらやみ顔に起きかへ」ったのを見た後の、源氏の「いと深からずとも、なだらかなるほどにあひしらはむ人もがな」という感懐は、末摘花に対する源氏の失望を表すと同時に、橘に象徴される「いと深からずとも、なだらかなるほどにあひしらはむ人」を源氏が欲していることを意味すると理解することも可能となろう。

右の末摘花巻の引用部分の表現が、橘に象徴され、かつ源氏との愛情関係はさほど深くはないにしても、源氏と穏やかに話ができる女性を源氏が望んでいることを示しているとすると、このような女性と花散里巻に至って初めて登場する花散里は極めて類似する。物語作者は右に引用した末摘花巻の場面を執筆する時点で、既に末摘花と同様、源氏と深い愛情関係では結ばれていないものの、源氏と互いに心を交わし、親しく会話のできる女性、かつ夏の季節を表す橘によって象徴され、それによつ

て南という方位も表象する女性、すなわち花散里のような女性を登場させることを準備していたと考えられる。

花散里が登場するのは源氏が二十五歳となる花散里巻であるが、物語作者は既に若紫巻、末摘花巻、すなわち源氏十八歳の年の物語を執筆する時点で、東・春を表象する紫の上、西・秋を表象する明石の君、東・北・冬を表象する末摘花という三人の女性を登場させるのみならず、末摘花巻で橘の花に象徴され、夏・南を表象する花散里のような女性の登場も視野に入れていたことになる。

## 五

では二条院の東に二条東院を建て、二条院の西の対に紫の上、二条東院の西の対に花散里、東の対に明石の君、北の対に末摘花を配置し、四方四季の邸を造営しようとする二条東院構想の根幹とも言うべき配置は、物語執筆時点のいつ決定されたのであろうか。

四方四季の邸というと竜宮が想起される。市古貞次は中世の小説類では竜宮が四方四季と記されていることに言及し、三谷宋一は様々な文献、伝承等の資料から、四季四方の邸が竜宮とされている例が多いことを指摘する。また、『栄華物語』巻二十三「こまくらべの行幸」の冒頭部分、高陽院における駒競行幸・行啓の準備の場面では<sup>3</sup>

この世には冷泉院、京極殿などをぞ人もおもしろき所と思ひたるに、この高陽院の有様この世のことと見え、海竜王の家などこそ、四季は四方に見ゆれ、この殿はそれに劣らぬさまなり。

と、海竜王の家を四方四季としている。市古、三谷が四方四季の邸を竜宮とし、『源氏物語』と同時代に執筆された『栄華物語』が、四方四季

の邸を海竜王の邸としていることを勘案すると、『源氏物語』が執筆された時代の貴族社会では、四方四季の邸は竜宮であり、そこには海之神の王である海竜王が住んでいると考えられていたことが想像される。

さて、この「海竜王」という語は『源氏物語』の中で度々用いられるが、その中でも特に印象深いのが、若紫巻の冒頭、北山山頂の場面で、源氏の供人の一人良清が明石の入道とその娘についての噂話をした際、供人の一人が「海竜王」に言及する箇所である。源氏は良清の噂話に出てくる明石の入道の娘に興味を抱き、「さて、そのむすめは」と良清に尋ねる。

「けしうはあらず、容貌心ばせなどはべるなり。代々の国の司など、用意ことにして、さる心ばへを見すなれど、さらにうけひかず。『わが身のかくいたづらに沈めるだにあるを、この人ひとりこそあれ、思ふさまことなり。もし我に後れて、その心ざし遂げず、この思ひおきつる宿世違はば、海に入りね』と、常に遺言しおきてはべるなる」と聞こゆれば、君もをかしと聞きたまふ。人々、「海竜王の後になるべきいつきむすめなり」、「心高き苦しや」とて笑ふ。

（若紫①二〇三—二〇四）

良清の答えを聞いて、源氏は「をかし」と思い、供人たちは明石の入道のプライドの高さを嘲笑する。供人の一人が発した「海竜王の後になるべきいつきむすめなり」という言葉は、明石という田舎に生まれ育った娘を都の高貴な人に嫁がせようとする明石の入道の常軌を逸した奇矯な考えを嘲笑したものであるが、この場面で、源氏の供人がこのような言葉を発するのは当時の常識からすれば至極当然のことである。この発言は明石の入道の「もし我に後れて、その心ざし遂げず、この思ひおきつる宿世違はば、海に入りね」という言葉を揶揄した巧妙な物言いとい

うことができよう。

確かにこの発言は、若紫巻のこの部分だけ読むと、まさに右のような解釈以外の解釈は成り立ち得ないのであるが、物語作者がこの場面に「海竜王」という言葉を用いたのには、さらに深い意味が隠されていたと考えられる。若紫巻のこの部分を読んだだけでは、物語中の登場人物はもちろん、若紫巻を読んでいる読者も、明石の君が「海竜王の後」になることなど思いも及ばないであろう。しかし、その後源氏は明石の地に流離し、明石の君を娶ることになる。源氏は超越的な資質を持った人物であり、通常の人間とは考えがたい。しかも、都に帰ると四方四季の邸を造宮する。四方四季の邸は竜宮であり、その邸の主は海竜王である。とすると、源氏は海竜王となるのであり、源氏の妻となる明石の君は海竜王の妻ということになる。このような物語の展開を辿っていくと、先に引用した若紫巻における源氏の供人の発言「海竜王の後になるべきいつきむすめなり」という発言は、若紫巻で持っていた意味とは全く別の意味を帯びてくる。物語作者は、若紫巻の当該場面では源氏の供人にかにも気の利いた皮肉を言わせたように見せかけながら、実は将来明石の君が海竜王である源氏と結ばれ、海竜王の妻となることを予告していたのである。だとすると、既に若紫巻の北山山頂の場面が描かれた時点で、源氏は海竜王となり、四方四季の邸に住むことが予定されていたことになる。

源氏の邸を四方四季にするということは、源氏と四方四季を表象する四人の女性を一所に住まわせることを意味する。しかも、一方では源氏と紫の上の結びつきを他の三人の女性たちより強固なものとする必要がある。四方四季を表象する四人の女性を一カ所に住まわせ、かつ源氏と紫の上の結びつきを他の三人の女性と区別して特別なものとしようとす

るなら、源氏と紫の上が住んでいる二条院の傍らにもう一つの邸を建て、他の三人の女性を住ませるといのが最も有効な方策となるであろう。しかも、この二つの邸の鬼門にあたる東北に邪悪な霊などの侵入を防ぐため醜い末摘花を住ませる必要がある。とすると、源氏と紫の上の邸宅の東側に他の三人の女性のための邸宅を造営し、北の対に末摘花を配置する必要がある。ただし、そうした邸宅の配置にした場合、東を表象する紫の上が西の邸宅に住み、西を表象する明石の君が東の邸宅に住むことになる。だが、物語作者はこの矛盾を逆手に取って、東を表象する紫の上を二つの邸宅の西の端、西を表象する明石の君を東の邸宅の東の端に配置する構想を選択したのであろう。先に検討したように、二つの邸の西の端に東を表象する紫の上を配置し、東の端に西を表象する明石の君を配置すると、二つの邸の東に東を表象する紫の上を置き、西に西を表象する明石の君を置くよりも、東と西の邸宅は融合、一体化し、一つのまとまりとして意味合いを強くする。このように考えた時、物語作者は源氏と紫の上が住む邸である二条院の東に、もう一つの邸宅二条東院を造営し、二条院の西の端に当たる西の対に紫の上、二条東院の東の端にある東の対に明石の君を住ませ、さらに二条院、二条東院の東北に当たる二条東院の北の対に末摘花を配し、北の対の南側に位置する二条東院の西の対に花散里を据えることを決定したのであろう。

だとすると、若紫巻で紫の上が二条院の西の対に引き取られたという記述は重要な意味を持つ。東という属性を持つ彼女がなぜ二条院の東の対でなく、西の対に迎え入れられたのか。それ以前の物語では源氏が二条院に住んでいることは示されていたが、二条院のどこに住んでいるかは明らかにされていなかった。若紫巻で幼い紫の上を強奪して二条院に迎え入れた時、紫の上が二条院の西の対に迎え入れられたのに呼応する

形で、源氏が二条院の東の対に住むことが明示されることになるのだが、東を表象する紫の上が二条院の東の対でなく、西の対に入居するということは、この時点で既に二条院の東に二条東院が造営され、その東の端の東の対に明石の君が住むことが予定されていたことを意味する。しかも、若紫巻でイワナガヒメに比定される末摘花の登場が予定されていたことからすると、二条東院の北の対に末摘花、残る二条東院の西の対に花散里が住み、二条院の西の端である西の対に紫の上が配置されるという二条東院構想の根幹ともいうべき構想が既にこの時点で出来上がっていたことを想像させる。

先に紫の上に東・春、明石の君に西・秋、花散里に南・夏、末摘花に東・北・冬という属性が割り当てられたのは若紫巻、末摘花巻であることから、源氏に関係の深い四人の女性に四方四季を表象させるという構想が成立したのは若紫巻、末摘花巻執筆時と想定したが、東・春を表象する紫の上が若紫巻で二条院の西の対に迎え入れられていることを考慮すると、二条院の東に二条東院が造営され、その東の対に東・秋を表象する明石の君、西の対に南・夏を表象する花散里、北の対に東・北・冬を表象する末摘花が住むという二条東院構想の根幹は既に若紫巻で構想されていたことになる。

さらに、若紫巻冒頭の北山の場面において、紫の上に東・山、明石の君に西・海という属性が賦与され、源氏の国土支配の正当性の根拠が、この東・山を表象する紫の上と西・海を表象する明石の君を娶ることにあることが提示されるとともに、明石の君が後に海竜王である源氏の妻となり、源氏の住む邸が四方四季となることが予告されるなど、須磨巻、明石巻以降の物語の展開も視野に収めた、極めて周到な構想のもとに物語を書こうとする姿勢が窺われることを考慮すると、二条院の西の対に

紫の上を住ませ、二条東院の東の対に明石の君、西の対に花散里、北の対に末摘花を入居させるという二条東院構想の根幹とも言うべき構想は、若紫巻が書き始められた時点では、既に物語作者の脳裏に存在していたと想定するのが最も妥当と考えられる。

六

以上、二条院の東に二条東院を造営し、源氏と四方四季を表象する女性たちをどのように配置するかについての構想が、若紫巻の執筆を開始する以前に決定されていたと推定したが、二条院、二条東院に入るその他の女性たち、すなわち明石の姫君、秋好中宮、玉鬘、空蟬、筑紫の五節といった女性たちは、いつ二条院あるいは二条東院に入居することが決められたのであろうか。

明石の姫君は、明石の君と紫の上を対の存在として描くことが決定した時点で、源氏と明石の君の間に彼女が生まれ、紫の上の養女となることが物語にとって必然となったであろうから、二条東院構想が成立した時点で彼女が二条院の西の対に移り住むことは当然予定されていたと想像される。

玉鬘は、帚木巻の雨夜の品定において、頭中将の体験談として夕顔について語る場面で物語に始めて登場する。

さるうきことやあらむとも知らず、心には忘れずながら、消息などもせで久しくはべりに、むげに思ひしをれて、心細かりければ、幼き者などもありしに思ひわづらひて、撫子の花を折りておこせたりし  
 (帚木(1)八二)

まだ世にあらば、はかなき世にぞさすららむ。あはれと思ひしは

どに、わづらはしげに思ひまとはす気色見えしかば、かくもあくがらさざらまし。こよなきとだえおかず、さるものになして長く見るやうもはべりなまし。かの撫子のらうたくはべりしかば、いかで尋ねむと思ひたまふるを、今もえこそ聞きつけはべらね。

(帚木(1)八三)

頭中将は、雨夜の品定の以前に夕顔と関係を持ち、子供まで生まれていた。しかし、この幼子は、夕顔巻の源氏と夕顔の馴れ初めから夕顔の死に至るまでの物語においては、全く登場しない。が、夕顔の死後、源氏が侍女の右近に夕顔の素性を尋ね、夕顔があゝ頭中将の話していた女であることを確認した後、右近に「幼き人まどはしたりと中将の愁へしは、さる人や」と尋ねると

「しか。一昨年の春ぞものしたまへりし。女にていとらうたげになん」と語る。「さていづこにぞ。人にさとは知らせで我に得させよ。あとはかなくいみじと思ふ御形見に、いとうれしかるべくなん」とのたまふ。  
 (夕顔(1)一八六)

という答えが返ってくる。ここで、頭中将と夕顔との間に生まれた子供は女の子であり、この時三歳であることが明らかにされる。源氏は右近にその子を夕顔の形見として引き取りたいとの思いを告げるが、夕顔巻では、それ以降その幼子に関する話は語られることはない。

夕顔巻は、源氏と夕顔の逢瀬から死別に至るまでを語ることに中心があり、源氏の夕顔との出逢いから死別までの物語にはこの幼子は全く登場しない。にもかかわらず、帚木巻で語られた幼子は、夕顔巻では夕顔の死後その存在が改めて確認される。もし、物語が夕顔巻で源氏と夕顔の邂逅から別れまでを描くことのみをテーマとしていたとするなら、夕顔の死後このような幼子の存在を語る必要はないはずである。にもか

わらず、夕顔巻において頭中将と夕顔の間に生まれた女子の存在が夕顔の死後語られるという事は、その子が今後の物語に再登場することを予想させる。夕顔巻における夕顔の娘に関する記述は、その娘玉鬘を後の物語に再登場させることを物語の書き手が予定していたこと推測される。

ところで、末摘花巻の冒頭では、

思へどもなほあかざりし夕顔の露に後れし心地を、年月経れど思し忘れず、ここもかしこも、うちとけぬかぎりの、気色ばみ心深き方の御いどましさに、け近くうちとけたりし、あはれに似るものなう恋しく思ほえたまふ。

(末摘花(1)二六五)

と源氏が夕顔のかわいらしさを忘れられず、様々の女性に手紙など贈っていると言われ、それに続いて、

かの空蟬を、ものををりには、ねたう思し出づ。萩の葉も、さりぬべき風の便りある時は、おどろかしたまふをりもあるべし。灯影の乱れたりしさまは、またさやうにても見まほしく思す。おほかた、なごりなきもの忘れをぞえしたまはざりける。

(末摘花(1)二六六)

と、源氏が空蟬や軒端萩を思い出す場面が描かれる。

さらに、先に引用した末摘花巻の、源氏が雪の朝、末摘花邸を出る場面が描かれた後、次のような叙述がなされる。

世の常なるほどの、ことなることなさらば、思ひ棄ててもやみぬべきを、さだかに見たまひて後はなかなかあはれにいみじくて、まめやかなるさまに常におとづれたまふ。黒貂の皮ならぬ絹、綾、綿など、老人どもの着るべき物のたぐひ、かの翁のためまで上下思しやりて奉りたまふ。かやうのまめやか事も恥づかしげならぬを、心

やすく、さる方の後見にてはぐくまむと思ほしとりて、さまことにさならぬうちとけわざもしたまひけり。かの空蟬の、うちとけたりし宵の側目には、いとわるかりし容貌さまなれど、もてなしに隠されて口惜しうはあらざりきかし、劣るべきほどの人なりやは、げに品にもよらぬわざなりけり、心ばせのなだらかにねたげなりしを、負けてやみにしかな、ともののをりごとには思し出づ。

(末摘花(1)二九七—二九八)

源氏は、末摘花が世間並みの器量であればそのまま関係を絶ってしまつたであろうが、彼女の容貌のあまりの醜さに、そのまま捨て置くこともできず、経済的な面での援助を続けることを決意する。源氏は、末摘花の醜い容貌を見るにつけ、空蟬の器量の悪さを思い出すのであるが、空蟬の身だしなみの良さに競べて、末摘花の無愛想さを嘆くほかない。

末摘花巻には、このように夕顔や空蟬が源氏の回想の中で語られる。このような表現を前提とすると、夕顔、空蟬、それに夕顔の娘玉鬘は、末摘花巻執筆以前に物語に登場していたことになるが、既に指摘したように、若紫巻と末摘花巻は連続して書かれたと考えられるから、空蟬や夕顔が登場する箒木巻、空蟬巻、夕顔巻、すなわち箒木三帖は、若紫巻執筆以前に書かれた巻ということになる。

ところで先に指摘したように、夕顔巻の夕顔の娘の記述のあり方から夕顔の娘、玉鬘は後の物語に登場することが予測されたが、右に示したように末摘花巻で夕顔や空蟬への言及がなされるということは、物語作者が末摘花巻以降も箒木三帖に語られた物語の内容をそのまま引き継ぐ形で物語を語り続ける意志を持っていたことを示している。とすると、玉鬘は若紫巻以前に成立した二条東院構想に含まれることになり、二条東院構想が成立した時点で、玉鬘は二条東院の寝殿に迎え入れられるこ



とが予定されていたと推測される。また、空蟬も同様の理由から二条東院の北の対に入ることが予定されていたと考えられる。

秋好中宮は、前坊と大臣家の娘である六条御息所との間に生まれ、伊勢の斎宮に選ばれるほどの女性であり、身分としては玉鬘より高貴な女性である。しかも父である前坊が亡くなっていることから、母親である六条御息所も亡くなるようなことがあれば、皇族および源氏の最有力者である光源氏の庇護を受け、養女となることが当然予想される。

その秋好中宮の母、六条御息所は、物語では夕顔と対比的に描かれる。例えば夕顔巻の冒頭部分は、次のように始まる。

六条わたりの御忍び歩きのところ、内裏よりまかでたまふ中宿に、大貳の乳母のいたくわづらひて尼になりにけるとぶらはむとて、五条なる家たづねておはしたり。  
（夕顔①一三五）

六条御息所が初めて物語に登場するのは、この夕顔巻冒頭の部分である。夕顔との出逢いを描く巻の冒頭に「六条わたりの御忍び歩きのところ」とわざわざその存在が、しかも初めて紹介されるということ自体、物語作者が六条御息所を夕顔と対比的に描こうとする意図を持っていたことを強く感じさせる。夕顔巻で六条御息所が登場する二度目の場面は、

御心ざしの所には、木立、前栽などなべての所に似ず、いとどのどかに心にくく住みなしたまへり。うちとけぬ御ありさまなどの気色ことなるに、ありつる垣根思ほし出でらるべくもあらずかし。（中略）  
今日もこの藪の前渡りしたまふ。来し方も過ぎたまひけんわたりなれど、ただはかなき一ふしに御心とまりて、いかなる人の住み処ならんとは、往くき来に御目とまりたまひけり。（夕顔①一四二）

とある。ここでは、六条御息所と夕顔の邸が比較され、源氏の思いはただ六条御息所の方に傾いているようであるが、夕顔への興味も次第に募っ

ている。三度目の登場場面では、

六条わたりのも、とけがたかりし御気色をおもむけきこえたまひて後、ひき返しのめならんはいとほしかし。されど、よそなりし御心まどひのやうに、あながちなることはなきも、いかなることにかと見えたり。女は、いとものをあまりなるまで思ししめたる御心ざまにて、齡のほども似げなく、人の漏り聞かむに、いとどかくつらき御夜離れの寝ざめ寝ざめ、思ししをるることさまさまなり。  
（夕顔①一四七）

というように、源氏が六条御息所と交渉を持つようになること、それ以前の熱意が冷めて、夜離れがちになること、六条御息所が極端にまでものごとを思いつめる性格である上に、自身が源氏より七歳も年上であることに引け目を感じ、世間の噂を気にして、もの思いに沈んでいる様が描かれる。

その一方で、源氏は夕顔との恋にのめり込んでいく。夕顔が間借りしていた五条のむさ苦しい家で夕顔と一夜を過ごした源氏は、翌日夕顔を近くの廢院に伴う。その廢院での夕暮れ時、源氏は桐壺帝を思いやると同時に、六条御息所を次のように思い浮かべる。

内裏にいかにか求めさせたまふらんを、いづこに尋ねらんと思しやりて、かつはあやしの心や、六条わたりにもいかに思ひ乱れたまふらん、恨みられんに苦しうことわりなりと、いとほしき筋はまづ思ひきこえたまふ。何心もなきさし向かひをあはれと思すまに、あまり心深く、見る人も苦しき御ありさまをすこし取り捨てばやと、思ひくらべられたまひける。  
（夕顔①一六三）

ここでは、目の前の夕顔の「何心もなき」様と六条御息所の「あまり心深く、見る人も苦しき御ありさま」が際やかに対比されている。

また、夕顔は廃院で物の怪によって命を奪われるのに対し、六条御息所は生霊となって源氏の正妻である葵の上を取り殺す。ともに靈力によって人が殺されるという点では共通するが、夕顔は殺される側であり、六条御息所は殺す側であるというように、ここでも両者は対照的に描かれる。

さらに若紫巻では、都に戻った幼い紫の上と祖母の尼君の住む邸の前を源氏が偶然通りかかる場面が次のように語られる。

秋の末つ方、いともの心細くて嘆きたまふ。月のをかしき夜、忍びたる所からうじて思ひたちたまへるを、時雨めいてうちそそく。おはする所は六条京極わたりにて、内裏よりなれば、すこしほど遠き心地するに、荒れたる家の、木立いともの古りて、木暗う見えたるあり。例の御供に離れぬ惟光なむ、「故按察大納言の家にはべり。一日ものたよりにとぶらひてはべりしかば、かの尼上いたう弱りたまひにたれば何ごともおぼえずとなむ申してはべりし」と聞こゆれば、

(若紫(1)二三五)

秋好中宮が物語に登場するのは葵巻であり、二条東院構想が既に成立していたと推定される若紫巻から四年の時が経過しているが、母六条御息所は夕顔巻、若紫巻でその存在がさりげなく語られ、特に夕顔巻では夕顔と対比的に描かれている。夕顔の娘玉鬘が二条東院構想成立時に二条東院の寝殿に入居することが決定されていたとすると、既に若紫巻以前に登場する六条御息所に娘がおり、その娘が玉鬘と対比的な存在として物語に登場することが予定されていたとしても不思議はない。源氏物語の作者が、対比的な組み合わせを好んで用いる作者であることを考慮すると、玉鬘が源氏の養女として二条東院の寝殿に入居することが予定されているとするなら、六条御息所の娘秋好中宮が源氏の養女として、二条

院の寝殿に入居ことは十分に予測される。

筑紫の五節は、花散里巻に初めて登場する。源氏が花散里の邸に向かう途中、中川の辺りでかつて一度だけ交渉を持った女の邸の前を通りかかり消息を遣わすが、女の方はわざと知らぬ振りをする。その場面に続いて

かやうの際に、筑紫の五節がらうたげなりしはや、とまづ思し出づ。

(花散里(2)一五五)

と源氏は筑紫の五節を思い出す。筑紫の五節は、その後筑紫から上京する際、須磨に蟄居している源氏と歌を贈答し、帰京後の源氏とも歌を贈答する。さらに濡標巻では、

かやうのついでにも、かの五節を思し忘れず、また見てしがなと心にかけてたまへれど、いと難きことにて、え紛れたまはず。女、もの思ひ絶えぬを、親はよろずに思ひ言ふこともあれど、世に経んことを思ひ絶えたり。心やすき殿造りしては、かやうの人集へても、思ふさまにかしづきたまふべき人も出でものしたまはば、さる人の後見にもと思す。

(濡標(2)二九九)

と記される。この引用部分の「心やすき殿造り」は、その年の春に造営が始まった二条東院のことであり、「思ふさまにかしづきたまふべき人」は既に述べたとおり、玉鬘と想定される。濡標巻のこの箇所で、源氏は筑紫の五節を玉鬘の後見人として考えている。玉鬘の入居が予定されているのは、二条東院の寝殿であるから、筑紫の五節も当然二条東院の寝殿に入居することが予定されていたであろう。しかし、松風巻冒頭で二条東院は完成するが、玉鬘はいまだ物語に登場せず、どこに居るのかその所在も知れない。従ってその後見となるべき筑紫の五節も当然二条東院に入居することはない。

しかも、松風巻冒頭で二条東院が完成したにもかかわらず、二条東院の東の対に明石の君が入らず、二条東院は当初の予定通りには完成しない。源氏の新しい住まいは六条院となる。二条院、二条東院が、かつて源氏と関係を持ち、源氏の須磨、明石への流離の際にも、源氏への思いを持ち続けた女性達を一堂に会する場として構想されたのに対し、六条院は春、夏、秋、冬の四つの町に、その季節を表象する源氏と関わりが深い女性をそれぞれ一人ずつ配するという構造を取る。

その結果、玉鬘の後見人として、二条東院の寝殿に入るはずであった筑紫の五節は入るべき場所を失った。濡標巻で筑紫の五節を二条東院に迎え入れようと思った時から四年後、乙女巻で源氏は五節の舞姫を見て、筑紫の五節に歌を贈り、幻巻では紫の上を追憶する一年の中で、五節の日に筑紫の五節を思い出す以外、彼女は物語に登場することはない。花散里巻で急遽登場し、濡標巻の二条東院造営の開始時に、二条東院での活躍が予告された筑紫の五節が、松風巻以降ほとんど活躍する場が与えられないという事実は、二条東院構想が松風巻執筆以前に六条院構想に改変されたことを示す有力な証左となる。

筑紫の五節が物語執筆のどの時点で、物語作者によって構想されたのかは難しい問題である。玉鬘は母親と死別して後、上流貴族の屋敷で養われる可能性はほとんど無かったであろうから、彼女に上流貴族としての身だしなみや教養を教える人物の存在は既に夕顔が死去した段階から必要とされていたと想像される。ただし、これまで検討してきた女性たちが、若紫巻、末摘花巻執筆時点で、その登場が何らかの形で予告されていたのに対し、筑紫の五節はその存在が花散里巻で言及されるまで、物語に登場する兆候が全く見出せない。この点を考慮すると、筑紫の五節が若紫巻、末摘花巻執筆時に物語作者の脳裏に浮かんでいたかどうか

は確定しがたいとするほかない。筑紫の五節あるいはそれに準ずるような人物を、若紫巻、末摘花巻執筆時点で物語作者が構想していた可能性は全くないとはいえないが、これまで検討してきた女性たちの中では、最も低いと言わざるを得ない。

## 七

以上本稿で述べてきたことをまとめると以下ようになる。二条東院構想の大枠は、二条院の東の対に源氏、西の対に紫の上と明石の姫君を住ませ、二条東院の東の対には明石の君、西の対に花散里、北の対に末摘花を入居させるというものであった。その構想は既に若紫巻執筆以前の段階で成立していた。また、以上のような配置が構想されるのと同じ時に、二条院の寝殿には、秋好中宮、二条東院の寝殿には玉鬘、北の対に空蟬が入ることも構想されていた可能性がある。筑紫の五節もこの段階で、二条東院の寝殿に入ることになっていた可能性がないわけではない。

二条東院構想は、源氏が明石から帰還した後、かつて源氏と関係があり、須磨、明石に源氏が流離している間も源氏への思いを変えることのなかった女性たちを一堂に会することを目論んだもので、二条院には源氏と最も格の高い女性たちが住み、二条東院にはそれらの女性たちより一段と格の劣った女性たちが住むという住み分けがなされていた。本来なら二条院と二条東院を合わせた二条院・二条東院空間の東に、東・山・仏を表象する紫の上、二条院・二条東院空間の西に西・海・神を表象する明石の君が配置されるのが自然と思われるが、東・山・仏を表象する紫の上が二条院・二条東院空間の西の端に当たる二条院の西の対に、西・

海・神を表象する明石の君が二条院・二条東院空間の東の端に当たる二条東院の東の対に配されるのは、二条院・二条東院空間の西に当たる二条院の西の対に東、山・仏を表象する紫の上、東に当たる二条東院の東の対に西・海・神を表象する明石の君を配し、さらに二条院に西・海・神を表象する明石の姫君、東・海・神を表象する秋好中宮、二条東院に東・山・仏を表象する末摘花、西・山・仏を表象する玉鬘を配することによって、物語作者が二条院・二条東院空間全体に東・西・山・海・仏・神という属性をあまねく賦与しようと思図したからであろう。と同時に、二条院の東に二条東院を造営することで、二条東院の北の対に醜い容貌の末摘花を配置することが出来る。二条院・二条東院空間の北東は鬼門に当たることから、そこに末摘花を配することで悪霊の侵入を防ぐことが企図されたと考えられる。

源氏は、東・山・仏を表象する紫の上と西・海・神を表象する明石の君を娶り、紫の上を二条院・二条東院空間の西、明石の君を二条院・二条東院・二条東院空間の東に位置せしめることによって、東と西、山と海を支配すると同時に、仏法の世界における世俗の理想の王、転輪聖王となり、神の王である海竜王となる。海竜王である源氏の邸、つまり二条院・二条東院空間は四方四季の空間となるが、このことは源氏が全ての方位と全ての時間を支配することを意味しよう。すなわち、二条東院構想とは、光源氏の絶対的な王者性を示す邸宅の造営を意図するものであったということが出来るであろう。

注

(1) 『河添房江『源氏物語表現史 喩と王権の位相』(翰林書房、平成10年) IV

光源氏の王権譚、3 北山の光源氏

(2) 拙著『王朝文学の始発』(笠間書院、平成21年) 第四章、第一節  
 (3) 市古貞次『中世小説の研究』(東京大学出版会、昭和30年) 第五章、3  
 (4) 三谷栄一『物語史の研究』(有精堂出版、昭和42年) 第三編、第三章  
 (5) 『栄華物語』の本文は、『新編日本古典文学全集』に拠る。

\* 二条東院構想試論(上)は『百合合女子大学紀要』第51号に掲載する。